トピックス

水路を活用した地域振興の取り組み ～足羽川堰堤土地改良区連合～

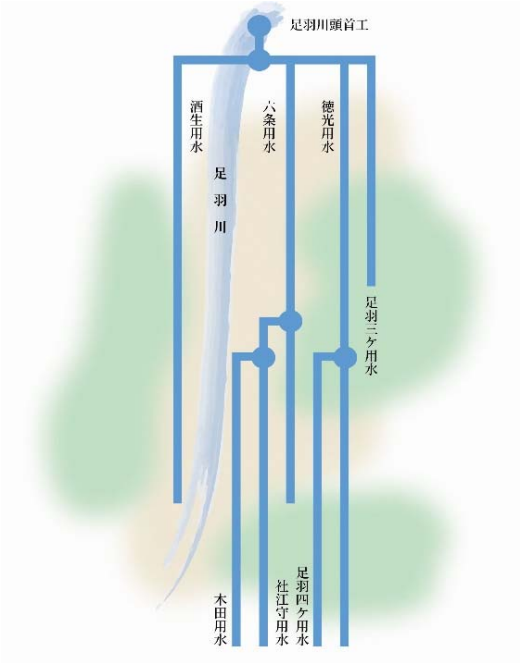
１．足羽川用水の概要

足羽川(あすわがわ）用水は、福井市南東部にある足羽川頭首工より取水し、約2,000ヘクタールの広大な農地を潤す７つの幹線用水路の総称で、用水路の総延長は74kmに及びます。

用水の始まりは、奈良時代（７世紀頃）に開かれた荘園内の原始的な水路で、各用水は足羽川から直接取水していましたが、均等な水配分ができず上下流の水争いが激しかったため、江戸時代に複数の用水系統を統合し、当時としては珍しい「合口（ごうぐち)」のための木工沈床による堰堤を建設するとともに、水路底の掘削による過剰な取水を防ぐため、分水地点に強固な石で囲った「定石（じょうせき)」を布設して用水の配分を明確にし、水争いを緩和してきたといわれています。

また、この用水は、1710年に行われた水路の測量設計の詳細記録によると、当時の水路幅員や分水量は現代とほとんど変わっておらず、今も安定した用水供給ができており、当時の計画・設計水準の高さが伺えます。さらに、荘園時代は400ヘクタールであったかんがい面積は現在の約2,000ヘクタールまで増加し、本用水掛りは福井県内でも有数の穀倉地帯となっています。

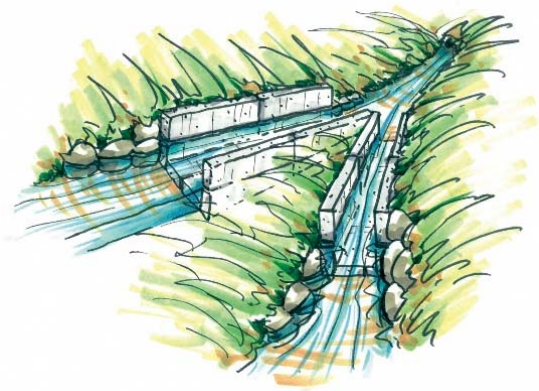
現在は水管理組織の適切な管理のもとで用水を安定供給する一方、小学生や地域住民と一体となって校庭内に水を引きこみビオトープを整備するなど、地域住民の生活に密着した地域用水としての機能を発揮しており、水や緑に親しむ拠点としても活用されています。



7つの幹線用水路

木工沈床により合口された堰

注）合口は、河川に設置された複数の取水口を1か所にまとめ、新しい水利系統に統合する手法



定石（イメージ図）

２．世界かんがい施設遺産への登録

足羽川用水は、①測量技術の高さ、②木工沈床による堰堤や水配分を均等にする定石の設置等の「技術力」の高さ、③旧来から地域住民の生活に密着した用水を現在でも活かし地域振興に活用している点、などが高く評価され、平成28年11月８日、国際かんがい排水委員会（ICID）が認定・登録する『世界かんがい施設遺産』に、福井県内で初めて登録されています。

３．足羽川堰堤土地改良区連合による地域振興の取り組み

足羽川頭首工・導水路等の維持管理や水量調節・監視制御等の水管理を担う足羽川堰堤土地改良区連合では、世界かんがい施設遺産に登録された平成28年度から令和２年度までの５か年を情報発信の強化年と位置づけ、PR施設の整備や認知度の向上対策として啓発活動を積極的に実施しています。

具体的には、PR施設の整備として、主要な分水工に取水地点からの距離、分水工名、用水路名や用水の行き先などがわかる「水標（みずしるべ）」を設置し、足羽川用水の歴史や役割、かんがいエリア等を所々で知ることができるようにしています。また、これらの施設を活用した体感スタンプラリー等も定期的に実施しています。

水標

体感スタンプラリー

啓発活動としては、水路を地域振興や次世代を担う小学生の育成に活用するため、足羽川用水を地域資源の一つとして捉え、酒蔵・お祭りなど地域にある他の「宝」と面的に結合させたイベントを平成29年度から毎年、開催しています。

このイベントには毎年100名程度が参加しており、足羽川用水の水利施設について、「今までなんとなく見ていた施設の役割が理解できた」、「多くの人々の協力があって、地域の資源が守られていることがわかった」等の感想があり、足羽川堰堤土地改良区連合によると、市民の意識啓発に繋がっていると実感しているとのことでした。

同連合は、今後も啓発活動を継続するとしており、今年度は、足羽川用水が行き渡っている地域の農作業の歴史を紹介する紙芝居を制作し、小学生を対象に出前授業を行う予定としています。

出前授業

地元児童の描いたイラストを貼り付けた水路